

心理学における時間研究の展開 「時間消費の心理学」に向けて (1)

佐々木 土師二

A Review of Psychological Research of Time: Toward a Psychology of Time-consumption (1)

Toshiji SASAKI

Abstract

For constructing a framework of psychological research of time-consuming behavior, previous studies were reviewed in the fields of experimental psychology, social psychology and sociology. Although experimental psychological studies of perception and estimation of short time duration have been done since the 19th century, they are not directly relevant to the study of time-consuming behavior. Both social-psychologists and sociologists have recently become interested in the problem of time, and the study of time-consumption is expected to develop in relation to the study of time-budgets. In addition, research of consumer behavior is expected to contribute to the study of time-consuming behavior.

Key words: time-consuming behavior, perception of time, time-budget, consumer behavior.

抄 録

自由裁量時間の使用を意味する「時間消費」の心理学的研究の体系化を図るための手がかりを求めて、先行研究における「時間消費」関連用語の使用例を見た後、実験心理学・社会心理学・社会学の分野における「時間」研究をレビューした。実験心理学では主に短時程の知覚・評価など「時間認知」研究の長い歴史があるが、「時間消費」研究との距離は大きい。社会心理学・社会学では時間への関心がきわめて低かったが、ようやくその分析の方向が生まれ、「時間消費」については生活時間配分の問題と関連づけた研究の展開が期待される。今後、消費者行動研究における「時間消費」への取り組みをふまえて、その研究的枠組の構築を図る必要がある。

キーワード：時間消費、自由裁量時間、時間認知、生活時間配分、消費者行動研究。

I 「時間消費」の心理学的研究について

I-1 「時間消費」を考える手がかり

(1) 自由裁量時間の使い方

「生活の質 (quality of life)」を把握するために「生活時間」を分析する視点を明確に示している調査資料として『生活時間の構造分析：時間の使われ方と生活の質』（経済企画庁国民生活局国民生活調査課編, 1975）が注目される。この資料では、「生活の質」の指標として生活時間にもとづいて多様性・同調性・多忙性という3特性を構成し、その分析を通じて「多様性と同調性による自由行動のパターン分類は、自由時間の使い方を把握するうえで重要な一つの枠組みである」（p.82）と総括して、この資料の副題に示されているように、「生活の質」と「自由時間の使われ方」との強い関連を指摘している。

この「自由時間の使われ方」の態様の著しい変化に着目し、とくに「所得多消費型から時間多消費型へ」という現象的特徴も認識した分析を行っているのが『これからの生活と自由時間：その現状と対策の方向』（経済企画庁国民生活政策課編, 1977）である。この分析資料では「自由時間」に関する詳細な考察が展開されているが、なかでも「生活時間は、個人に帰属する資源」（p.1）にとらえ、さらに「自由時間は、自己の時間資源の使い方について意思決定しうる自由裁量時間として、また自ら参加し、自ら束縛すべき活動を選択する自由が存在するという意味の自由選択時間や自由行動時間として、定義づけられるのではなかろうか」（p.2）と述べ、「自由裁量的な時間資源の使い方」を生活時間配分（つまり、生活時間構造）のなかに的確に位置づけることの必要性にふれ、また「個人個人の自由時間消費の自由度を尊重する」（p.7）という姿勢が求められるとしている。

こうして「自由時間消費」という表現に遭遇するが、上記の文脈を念頭におきながら、われわれが取り上げようとしている「消費資源としての時間」は「自由時間 (free time)」あるいは「自由裁量時間 (discretionary time)」である。「生活の質」の向上は所得の増大や生活財の充実によっても実現されるが、今日では、所得の使途や生活財の選択に関する自由裁量性だけでなく、自由裁量的な生活時間の過ごし方にも注目することが重要である。

この「自由裁量的に生活時間を使う（過ごす）こと」を「時間消費」と称し、また「消費資源としての時間の使い方」を「時間消費行動」と呼んで、その心理学的な考察を行うのが「時間消費の心理学」ということになる。

(2) 先行研究における「時間消費」という表現と意味

今では、時間を使うこと (use of time; time usage) に関連して「時間消費」という表現が用いられることは決して稀なことではない (赤松 1993, p.29; 矢野 1995, p.31; 根本 2000; 佐々木 2001)。ただ、この種の概念はかなり古くから用いられていたのではないかとと思われる。英文の図書・論文でそれを意味するものに、生活時間配分 (time-budgets) に関する最初の実証的体系書を著した Sorokin & Berger (1939) が、先行研究を紹介するためにやっているカテゴリー設定で time expenditure (あるいは expenditure of time) という言葉を用いている (p.9-23)。その後、Kleemeier (1961) が、高齢者の余暇問題に関する論文の序論で、時間 (time) とお金 (money) の間のアナロジーとして両者で「貯める (saving)、費やす (spending)、無駄にする (wasting)、投資する (investing)」という共通の表現があると述べ (p.6)、加えて「時間消費者 (time-consumer)」という用語を用いている (p.126)。また、Moore (1963) も、時間を通して人間の行為の秩序性を社会的に考察した図書において「時間消費的な願望や活動 (time-consuming wants and activities)」(p.7) とか「時間消費的な役割 (time-consuming role)」(p.34) という表現をしている。

他方、消費者行動研究の分野では、「時間消費」という用語は1970年代に一般的になったと見ることができよう。たとえば Foote (1966) は種々の「時間消費的活動 (time-consuming activity)」の好みの評定や1日当たり消費時間についての調査結果を報告しており、Scharly (1971) は「消費と時間問題 (Consumption and the problem of time)」と題する論文のなかで time use はもとより、expenditure of time (時間の消費)、consumer time behavior (消費者時間行動) など「時間消費」関連用語を頻繁に使用している。さらに、Jacoby, Szybillo & Berning (1976) の「時間と消費者行動：学際的概観 (Time and consumer behavior: An interdisciplinary overview)」と題したレビュー論文では consumption / utilization of time (時間の消費・活用) のほか time expenditure という語句が多用されており、Szybillo, Binstok & Buchanan (1976) も time expenditure や time consuming という用語を使用している (p.75)。

このような先行研究における「時間消費」という表現は、「時間の使用 (use of time)」を一般的に意味している場合もあるが、より限定的に「自由時間の使用 (use of free time)」あるいは「自由裁量時間の使用 (use of discretionary time) の使用」を意味していることもある。Sorokin & Berger (1939)、Kleemeier (1961)、Moore (1963) らはとくに限定的な意味で用いているようには見えないが、消費者行動との関連で時間消費に注目している

Foot (1966)、Schar (1971)、Jacoby et al. (1976) は、時間の選択可能性や自由裁量性をふまえた論述を行っている。

われわれは、先述のように「時間消費」という概念を「自由裁量時間の使用」したがって「自由時間の自己選択的使用」を主に意味するものとして用いることにする。

I-2 「時間の心理学的研究」の枠組み

このようにある程度限定的な意味で「時間消費」の概念を用いるとき、それを「時間に関する人間行動」のなかでいかに位置づけるか、また、それ以前に、「時間に関する人間行動」をどのような視点でとらえるかが問題になる。

この点に関して、われわれは『時間の心理学：その生物学・生理学』（原吉雄訳・佐藤幸治校、東京創元新社、1960：原題 *Psychologie du Temps.*）の著者 Paul Fraisse (1957) が述べていることが参考になる。

Fraisseは、時間の「概念」に関するデカルト (Descartes, R.) やカント (Kant, E.) などの哲学的考察を概観し、19世紀半ば以降の精神物理学者の実験的取り組みも見たうえで、「心理学的問題は、もはや時間が何であるかを知ることでもないし、時間の観念の本質を知ることでもなく、また何らかの直観あるいは精神の何らかの構造におけるその発生を知ることでもなくて、人間がその中に生きるべく運命づけられているところの変化する事態に対して、いかに反応するかを解明することである」（原訳、p.13）と述べている。つまり、「変化する事態」である時間的現象や「推移する事象」で表される時間的経過に対する人間反応を心理的・行動的レベルで分析することが心理学研究の課題であると考えられる。

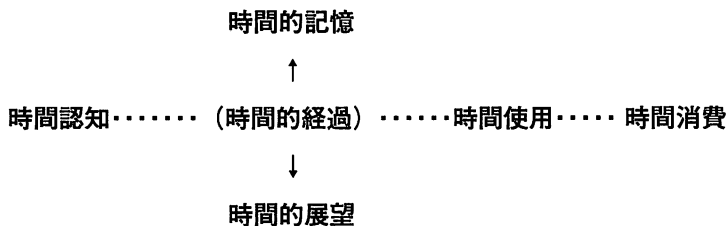
ところで「時間的現象や時間的経過に対する人間反応」を心理学的研究課題とするために、いかなる「現象」や「経過」を取り上げればよいのだろうか。つまり「時間の心理学」の研究対象は何か、ということである。この問題を考える時、ふたたび、Fraisse (1957) の『時間の心理学』の緒言の冒頭にある次のフレーズがヒントになる：

他の存在と異なって、人間は変化のなかに生きていることを知っている。記憶によってそれを再構成することができるし、将来の継起を予見するために法則を発見することができる。かくて、変化に単に従う代りに、それを利用することを、ひじょうに早くから学ぶ。（原訳、p.3）

つまり、このフレーズのなかに「時間の心理学的研究」で取り上げるべき課題が、集約的に述べられていると読みとることができる：

- ① 「人間は変化のなかに生きていることを知っている」……時間的経過を知っていること、つまり「時間知覚」「時間評価」「時間意識」など「時間認知」の問題。
- ② 「記憶によってそれ（変化）を再構成する」……時間的過去を想起する「時間的記憶」の問題。
- ③ 「将来の継起を予測する」……現在の延長上にある将来に起こりうる現象を予見したり期待することは「時間的展望」の問題。
- ④ 「変化に単に従う代りに、それを利用する」……「時間の経過に委ねる」ことだけでなく「時間を有効に活用する」ことを含む、「時間使用」や「時間活用」などの問題で、その一つの側面としての「時間消費」の問題。

したがって、「時間」に関する心理学的研究の範囲は「時間認知」「時間的記憶」「時間的展望」「時間使用」の4分野に集約することができ、そして、この4分野の関係は、説明のために「時間的経過」を媒介させて下のように図式化することができるが、「時間使用」の一つの領域に「時間消費」があるということができよう。



I-3 本稿の狙いと限界

消費者行動には「時間を使う」という側面があることは自明のことであり、この側面についての心理学的分析を行うことは興味深いことであろう。

そこで、義務的・拘束的・強制的な時間の使い方ではなく、人々が、その使い方を自由に選び決定できる時間に範囲をしばり、そのように「自由裁量的に生活時間を使う」ことを「時間消費」と呼んで、その心理学的研究の体系化を図りたいというのが最終的な目標である。しかし、そうした「時間消費の心理学的研究」は、学問領域の境界が定かでない今日では、とくに「時間」のように多くの学問領域からのアプローチが可能である問題については、どこでどのような研究が行われているか予断を許さないところがある。それらの研究を網羅することは不可能であると思われるので、当面は手の届くところに突破口を見出して、そこに研究的橋頭堡を築くことが必要だと考えるものである。それ以後は、おそらく「点と点をつなぐ」ような形の前進を試みることが求められるように思われる。

そうした姿勢から、最初に、心理学的研究として、従来、どのように「時間」への、と

くに「時間消費」への取り組みが行われてきたのかについて、認識を深めたいというのが本稿の目的である。

そこで、まず、「時間認知」に関して実験心理学の分野での研究の概要を知ることを目指した。この「時間認知」に関する知見が「時間消費」に関連するのは、「時間の生活的な価値や意味」や「時間内の経験・活動内容と時間の長さの印象・評価との関連」というような、生活行動を伴った時間の認知の場合であるかも知れないが、心理学的に基礎的な時間現象について理解しておく必要があるものと考えからである。

次に、社会心理学や社会学における「時間」へのアプローチを把握しておきたい。今日では、自由裁量時間の使い方は主に社会的行動に向けられており社会的意味を持つものと思われるので、この研究領域で「時間」をどのように、どこまで取り上げているかについては強い関心を向けざるを得ない。

本稿ではこれら3分野を直接の展望範囲としているが、この範囲内でも「点と点をつなぐ」ことが今後も必要になるものと思われる。しかし、とにかく「小さな一歩」を踏み出したいというところである。

Ⅱ 心理学における「時間認知」研究の展開

Ⅱ-1 黎明期の「時間の心理学」の研究

(1) 「時間論と実験的研究」をカバーした最初の展望論文

心理学の領域での「時間」に関する研究の最初のレビュー論文はNichols, H. (1891) の「時間の心理学 (The psychology of time)」であり、*The American Journal of Psychology* 誌の77ページを占める大部なものであるが、その内容は「Ⅰ. 歴史 (Historical)」と「Ⅱ. 実験的研究 (Experimental Investigation)」とに分かれている。

第Ⅰ部「歴史」では、プラトンの時間概念やアリストテレスの時間知覚論など紀元前のギリシャの哲学者の時間観を述べた後、デカルト、ホ布斯、ロック、ライブニッツ、ヒューム、カント、ショーペンハウアー、ミル親子、スペンサー、ホッジソンなど16世紀から20世紀にわたる代表的な哲学者によるさまざまな時間論を追跡するとともに、ウェーバー、ヴェント、ミュンスターベルグ、ジェームスなど19世紀から20世紀にかけて活躍した心理学

者の研究業績を紹介している。ここに登場する人物は60人にのぼり、「時間」をめぐる論述の史の変遷が実に壮大に叙述されているが、その結語としてNichols (1891) は、これらの理論的見解は多様で幅広く一貫性が見られないとし、その論議の内容に関して次のように述べている (p.502) :

(以上のような論議の歴史的展開を振り返ってみると) 時間の神秘 (time-mystery) に対して示された説明がきわめて多種多様であることに圧倒されるだけである。時間は、心の作用、理性の作用、知覚の作用、直観の作用、感覚の作用、記憶の作用、意思の作用、これらすべてから構成されるあらゆる合成物と構成物の作用、などと呼ばれてきた。それは、苦痛や快楽に関して考えられているものに似た仕方、あらゆる精神的内容に伴って生じる一つの一般的感覚 (general sense) であるとみなされてきた。それは、よく馴染んでいるフィーリングや、その厄介さのために変につくり出されたフィーリングなど、いろいろなフィーリング (感じ) に近づくための、孤立した、特殊な、まったく異種の感覚であるとされてきた。それは、関係によって、特徴によって、記号によって、名残りにによって、奮闘および争いによって、発光連続体によって、見かけ上の現在のさまざまな形によって、統覚によって、説明されてきた。それは、先験的 (アプリオリ) である、生得的である、直観的である、経験的である、機械的である、などと言われてきた。それは、内部あるいは外部から、天から、地から、これらの一つであるとは想像できない種々の物事から、推論されてきた。遂には、現代の高権威者の一人は、時間は「長らく求めていた空間の第4次元 (the long-sought-for fourth dimension of space)」であることを見出している。

また第Ⅱ部「実験的研究」では、19世紀後半に活躍した心理学者20人による実験やそれへの批判の内容を抄録しているが、その総括として次のように述べている (p.527) :

「時間心理学 (time psychology)」の実験的分野を見れば、その結果は、さきに第Ⅰ部で見た時間知覚の理論に関する結果ほどの満足をもたらすものでなく、明確な結論を得ているものでもない。ほとんどの実験では、恒常誤差 (constant error)、感受性 (sensitivity)、ウェーバーの法則 (Weber's Law) を決定することに絞られており、そのうちの二つをとらえている場合が多い。

これらの実験を要約して最も結論らしい結果を示すと、次のようになろう :

- ・ ほとんどの人が、ほとんどの条件の下で、特定の長さの時間間隔が、他の時間間隔よりも、容易かつ正確に判断できることを見出している、
- ・ この無記点 (indifference point, 中性点) あるいは最もよく判断できる時間間隔は、個人によっても、時間や条件の差によっても、大きく異なる。
- ・ 恒常誤差の符号 (正負) は無記点から両方向にほぼ一定値をとる。
- ・ 単一の基準刺激 (norm) に対する再生 (reproduction) では、その恒常誤差は、無記時間間隔 (indifference interval, 中性的時程) より長い間隔の場合にはマイナスに、短い間隔の場合にはプラスになる。
- ・ 複数の基準刺激に対する再生では、その恒常誤差は、無記時間間隔より長い間隔の場合にはプラスに、短い間隔の場合にはマイナスになる。
- ・ 多くの結果は、ウェーバーの法則が適合しないこと、周期性 (periodicity) の法則がいつも見られるものではないことを示している。

このように、短い時程の判断や弁別の「正確さ」を中心にした知覚の問題が実験的に取り上げられている。

(2) 「時間の心理学」のわが国初の研究書：安部三郎(1936)『時間意識の心理』

「時間の心理学」に関するわが国初の研究書は安部三郎著『時間意識の心理』(東宛書房, 1936)であると思われる。

この書物で、安部(1936)は、最初の3章で、多くの哲学者による時間概念を比較論考したうえで、時間意識、時間体験、時間直感などの心理的現象についての考察を行い、体験時間の3形態として意的時間、感情時間、知的時間を区分してそれぞれの特徴を論述するなど、根本的な「時間論」を展開している。次いで(第4章～第7章)、知覚的時間(直観的時間と同義。)について「その時間経過が統一的全体として把握され而も把握体験が直接的であり現実的であるような時間」(p.69)と規定し、その上限(統一的全体の範囲)と下限(絶対的時間閾)や識別閾の測定実験、時間感覚や時間直感などの時間知覚に関する諸説、「現在」に関する諸説の紹介している。この知覚的時間に関しては、つづく第8章～第11章で、安部自身の観察実験結果も含めた研究成果の概要を集約しており、その時間意識の現れ方や絶対印象などの体験的現象の特徴を記述するとともに、2時程比較判断に関する種々の問題(識別閾、ウエーバーの法則、評価誤差、無記時間現象、休止時間効果、空虚時間と充実時間、時程の区切り刺激の影響、注意緊張の影響、等)についての実験の結果を述べている。

このように、知覚的時間を成立させる短時間(短時程)の評価・判断に関する実験だけでなく、第12章では、比較的長い(12秒以上の)時間の評価やその影響要因(年齢、性別、経験内容の豊富さ、情意や注意、等)の研究成果を、また第13章～第14章では、睡眠時の時間評価、病的変態的な時間経験についての研究を展望している。

そして最終章(第15章)は「時間評価の根本尺度と未来、過去、現在」と題され、未来時間、過去時間、現在時間のそれぞれで、その性質を検討したうえで、その時間的長短の評価(印象または判断)の主観的な根本尺度(=基本的要因)の特性について、外国の先行研究の知見を参考にしながら独自の解釈論を展開しており、「時間意識」の成立に影響する要因を考察する内容になっている。ここでは、次の要約に示す論述が展開されている：

未来時間(現在から未来のある時点までに志向された時間)の長短の評価(印象・判断)を規定するもの(つまり、根本尺度)は、その時間の中に入り来るであろう「経験や事件の表象の数量」ではなくて、未来に満足を求める「欲望の強度」であり、経過しつつある未来時間が「強い欲望」によって志向されている場合よりも「弱い欲望」によって志向されている場合の方が「長く」感じられ、「欲望なき状態」では未来時間は生じない(p.237-41)。しかし、こうした「情意に染められた時間」(p.243)ではなく、未来時間内が「知的に」評価される場合もあり、その際の根本尺度は「想像される事件の表象の数量」になる(p.244)。

他方、過去時間（現在から過去のある時点までに志向された時間）は、未来時間よりも空間的に表象されやすく、その時間内に経過した経験内容の系列を「記憶」として体験し、その時間の長短の評価は、記憶に浮かべられた「経験内容あるいは事件の数量の多寡」（p.246）、つまり「主観的豊富さ」（p.248）に依存する。そして、その経験内容に対する興味、新鮮さ、印銘（印象記銘）の強さ、注意緊張などの感情的要因が第2義的に作用する。

また、現在時間（「今」という感情に統一されて直感される一定の延長を有する持続、つまり、知覚的時間）は、過去の事象についての把持（retention）と未来の事象についての予期（protection）の両者を内包する時間として、過去時間および未来時間の評価に影響する要因から影響を受け、そのどちらに依存するかは「（意識的および無意識的な）心構え」による。その「心構え」は、短い現在時間の評価では時間内の経験の豊富さや著しさに依存し、長い現在時間の評価では時間経過中の期待緊張や快不快など感情的要因に依存する。（p.249-51）

こうして、黎明期の「時間の心理学」は、哲学的な観念論をベースにししながら、実験的課題としての興味を深めていったと見ることができよう。

Ⅱ－２ 「時間」に関する実験心理学的研究の発展

黎明期の「時間の心理学」の中心課題である「時間知覚」に関する実験心理学的研究は、その後、取り扱う課題を、知覚の「正確さ」や「弁別力」だけでなく、大幅に拡大している。20世紀の前半における研究動向を知るためにはWeber（1933）、Gilliland, Hofeld & Eckstrand（1946）、Woodrow（1951）などが著したレビュー論文が注目され、これらの論文が「時間心理学」の主要課題の広がり伝えてくれる。

（１）20世紀初期の実験的研究

まずWeber（1933）は、時間経験に関する理論や時間評価についての実験的研究の1910年代からの進展を次の6カテゴリーに集約し、それぞれの関連研究を紹介している：

（1）時間の性質

時間経験に関するベルグソンの生氣論的見解、時空相対、客観的時間と主観的時間の区別の明確化など、時間の主体性や経験的概念化を論じた研究に注目している。

（2）時間と空間の経験的關係

知覚における時間と空間の相互依存性、運動現象における速度や時間の知覚などが取り上げられている。

（3）時間概念の発達の研究

子供と成人の間で、時間内の従事作業が経過時間評価に及ぼす影響や、時間の意味や概念についての知識的変化を比較した結果を紹介している。

（4）時間の評価とそれに影響する条件

空虚時程と充実時程の比較、時間内の活動内容や従事作業の精神的負荷レベルと時間評価との関係、過去・現在・未来の時間イメージの成立、快・不快などの心理的経験内容と時間評価との関係、など多面的な課題が扱われている。

（5）時間評価と有機体的および運動感覚的要因との関係

睡眠時の経過時間評価、起床時刻の正確さを左右する要因、時間経験への感官筋肉統制の影響、時間評価へのリズム体験の影響、などのテーマを取り上げている。

(6) その他

時間間や時間順位誤差などの精神物理学の課題、薬物などによる時間経験の異常性の問題に触れている。

(2) 時間知覚の研究

またGilliland et al. (1946) は、その論文の冒頭で、時間知覚に関する研究は次の側面から分類できると述べている：

- ① 比較的短い時間（時程 duration）の評価。
- ② 評価することを被験者にあらかじめ告知していない場合の時間評価。
- ③ 時程の評価と再生（評価では単位が必要だが、再生では必要でない）。
- ④ 短時程（せいぜい数分まで）の評価と長時間（1時間、1日など）の評価。
- ⑤ 人間と動物の時間知覚。
- ⑥ 昼間（覚醒時）と夜間（睡眠時）の時間評価。

そのうえで、次の6領域に分けて時間知覚の研究を概観している：

- (1) 時間知覚の手がかり
空間知覚ほど手がかり（cue）についての論議はないとしながら、身体的・生理的過程、動作、心理的状态などとの関連分析や薬物・病気などの影響を検討した分析を紹介している。
- (2) 満たされた時間と満たされない時間
初期の研究に多かったテーマであるが結果は一義的でなく、物理的な充実・空虚よりも、注意や困難性など時間内活動の心理的条件に依存すると考えている。
- (3) 時間知覚の個人差
無記点、ウェーバー＝フェヒナーの法則などに関する結果は一義的でなく、性差も学習差によるものと考えている。
- (4) 下等動物の時間知覚
遅延選択反応や延滞条件反応に関する種々の実験結果を示し、時間知覚の問題に含まれると述べている。
- (5) 時間知覚の学習
時間概念の発達との文化的影響、子供の時間知覚に加えて、時間知覚における感覚器官の適合性などを取り上げている。
- (6) 時間知覚の理論
体内時計など時間感覚を仮定した考え、精神分析的解釈、生理的・身体的過程との対応を想定する立場などがあるが、時間評価が対象時間内の事象の頻度や程度に依存することを考えると、「時間知覚（time perception）」より「時間判断（time judgement）」のプロセスに注目する必要があると述べている。

さらにWoodrow (1951) は、20世紀に入ってから時間知覚の研究を概観し、この領域では研究者の間で知見の食い違いが大きく、また、そのデータには精神主義的（メンタリスティック）な性質があると指摘しているが、以下の4分野における研究の集約を行っている：

(1) 時程の比較と再生

連続時程と空虚時程の2種類が用いられ、弁別や再生の正確さの測定や無記の時程の探索に関する多くの実験が行われているが、これに関連して、刺激特性の効果の比較や被験者の態度の影響なども分析されている。

(2) 一つの時間的経験に関する内観報告

特定時程に対する絶対印象や心理的現在の上限と下限の測定など短時間の経験的事象に加えて、長時間の評価の問題に注目し、時間内従事活動の性質、時間評価の事前意図と時間経過意識との関連、薬物や病気の影響、睡眠の影響などに触れている。

(3) リズム

継時的刺激によるリズム感覚の成立とその条件に関する研究を紹介している。

(4) 時間知覚の理論

時程の知覚はなんらかの変化に伴って生じ、時間は何らかの手がかりとなるものによって間接的に判断される。つまり、時間は直接的に知覚されるものでなく、それに関する判断過程を通してのみ知覚的現象になる、と考えている。

Ⅱ－3 「時間に対する反応」に関する実験心理学的研究の総括

冒頭で引用したFraisse (1957) の『時間の心理学』は、翻訳者である原 (1960) がその「はしがき」で「実験心理学が時間意識の問題を扱い始めてから後の1世紀間の諸研究を総括し、総決算したもの」と述べているように、「時間に対する人間反応」の諸側面に關する実験的研究の経過と成果を体系的に叙述したものである。

時間に関する経験的現象（時間体験）は、心理学が意識体験の科学として始まった時、当然、最初に研究されるべき体験の一つであり、初期の心理学者たちは時間の性質について詳しく思索したが、そうした理論的研究とかけ離れて、さまざまな状況における時間についての実験的研究がほとんど一貫性なく行われていた (Ornstein, 1969, [本田訳, 1975. p.12-3])。しかも心理学における行動主義 (Watson, J. B., 1924) によって「精神主義」が追放され、また、時間体験は特定の感覚器官や物理的刺激に対応づけられないために科学的分析の直接的な出発点がないとして、きわめて低調になった。1950年頃までに行われた研究は、一発主義的で断片的な成果を生み出すに止まっていたが、それ以後、心理学において意識に関する関心が全般的に復活すると同時に、心理学者の時間体験に関する関心も新たになっていった (本田訳, 1975. p.14-5)。

Fraisse (1957) の『時間の心理学』はその頃に出され、過去75年間の研究をかなり完璧に概観したもの (Ornstein, 1969 [本田訳, 1975. p.15.]) である。Fraisse自身は「“時間的行動” という名称の下に、人間がその生存の時間的條件へ順応する各種の方式の研究を提議する」ものであると述べ (原訳, 1960. p.13)、その時間的條件へ順応する方式（反応）は、順応の三つの水準に対応する三つの反応群に区別できるとして、次の3部8章で同書を構成している：

第1部：時間への条件づけ

周期的変化への順応（第1章）……順応の第1水準は生物学的であり、何らかの規則性をもって変化する条件への条件づけによって有機体（人間や動物）に共時的変化が生じるが、その変化が周期的であれば有機体の活動に同一周期が生まれる。この活動の規則性は始めは外発的であるが、次第に環境から独立した内発的なものとなり、生理心理的な体内時計が組み立てられ、有機体はそれを時間的オリエンテーションに利用する。

時間的持続への条件づけ（第2章）……古典的条件づけでの延滞条件づけや道具的条件づけにおける一定時間後の反応生起などは、有機体が環境への順応に際して時間的持続（時間間隔）を計算していること、つまり時間評価が成立していることを示している。

第2部：時間の知覚

心理学的現在（第3章）……連続的变化を知覚することで「持続」の経験が生じ、非連続的变化の知覚は「継起」の経験を生じるが、順序や時間的間隔などで分離されている諸要素が統一されて同時性のある「現在」として一つの知覚的単位となると、それは知覚的現在あるいは心理的現在と呼ぶことができる。心理的現在の成立には、刺激の数やその間隔、要素の全体的な有意義性、注意（方向、動揺）などが関係している。

時間の閾（第4章）……心理的現在のなかで、瞬間から持続への知覚的变化、同時性の知覚の成立、同時から継起への移行にはどんな条件が関係しているか。

知覚される持続（第5章）……人は心理的現在の限界内で時間を知覚し、時間的持続（時程）は「短い～長い」という知覚を生じるが、短くも長くもないと判断される無記時程（約0.7秒）がある。短時程は過大視され、長時程は過小視されるが、この時程知覚には刺激の物理的要因が種々関連し、態度の影響は空間的知覚の場合より強い。時程の差の知覚ではフェヒナーの法則は妥当しないが、ウェーバー比は比較的恒常である。

第3部：時間の支配

時間的視界（第6章）……人は時間の次元を意識的に展開し、過去を喚起して再構成し、将来を予見して設計することができる。この時間的視界の成立には年齢や人格の影響があり、また個人が過去・現在・将来のどれを重視するかによる差もあるが、「将来への逃避」や「過去への復帰」では病的な場合もある。

時間の評価（第7章）……時間的持続（時間経過）を強く意識するのは「待つ」場合であるが、そうした時間の感じは、欲求満足を延滞させられたり幸福な状態の終了を予見する場合のように、欲求阻止を意識化することによって生じる。他方、欲求が実現されている瞬間には時間経過を感じない。時間的持続の評価の様式や基準にはいくつかのタイプがあり、その長さの知覚には仕事内容や態度・動機など「事態」に関連する客観的・主観的要因が影響しており、年齢や性などの個人的要因による差異もある。

時間の観念（第8章）……時間的条件に対する人間の順応のもっとも完成されたものが「時間の観念」であるが、それは、順序と持続および両者の連鎖的關係を直観的・知覚的に理解する段階を経て、それらを表象化して直接的・具体的経験から独立させ、そうした経験を前にも後にも移動させることができる可逆的で連続系列的な変化として再構成することによって成立する。

以上のようなFraisie（1957）による総括は、基本的には「時間認知」の諸側面に重点を置いた体系的叙述であると言えることができるが、第3部「時間の支配」では、「時計で計る時間（時計時間）」に関する認知システムとは別の「時間意識」や「時間体験」の経験システムが心理学的研究領域になることを示しているものと理解される。

Ⅱ－４ 認知心理学的アプローチ

(1) 比較的長い持続時間の体験：時間認知のダイナミックな機能

すでにGilliland et al. (1946) やWoodrow (1951) が時間認知の基本的機能を「知覚」でなく「判断」で見ようとし、またFraisse (1957) が「時計時間」とは別に「心理的・行動的な意味をもつ経験時間」としてとらえる姿勢を見せていたが、こうした「体験的時間」を分析課題とする立場を明確に出しているのがOrnstein (1969) である。その著書『時間体験の心理』(本田時雄訳, 1975: 原題 *On the Experience of Time*) では、過去の時間研究が、時計時間を「真の時間」として、その感覚器官を探し出そうとしたり、その感覚過程をつかさどる生理的機能や生物学的時計(内部時計)を明らかにしようとしたり、「時計時間」の認知の正確さに関する分析に力を入れてきているが、そうした「時計時間と体験的時間との関連」にとらわれるのではなく、「体験的時間それ自体」を分析課題とすべきであると考えている。

Ornstein (1969) は、まず、時間を研究する心理学者の努力がバラバラであったのは「時間体験」の体系的な分類が行われなかったためであるとし(本田訳, 1975. p.34.)、時間体験の種々の異なる様相は次のように4つに分類できると述べている(p.17ff; p.34.)：

1. 現在、短時間。(われわれがほぼ直接に接している時間で、非常に速く、不断に変化し、消えていき、永遠に新しい現在によって置き代えられている時間。)
 (a) 短い時程の“知覚”。(直接的な知覚または把握。)
 (b) リズムまたはタイミング。(時間の律動運動的側面。)
2. 持続、過去、長期記憶。(連続的な、たゆまず続く時間。短時間は連続しているが、常に視界から消えていく。持続はいくらか永続性を持っている。持続の体験は過去の事物の記憶に依存していることが多く、この時間体験は「短期蓄積としての現在」と「長期蓄積としての過去および持続」とに分けられるが、それぞれ記憶を含んでいるので両者の相関は高い。)
3. 時間的見通し。(他の様相よりも哲学的、社会的、文化的な解釈を受けやすく、そのために異なる時間概念が構成され、異なる時間体験の解釈も生まれやすい。)
4. 同時性。(“同時”は時間体験の単位が何かによって異なる。)

Ornstein (1969) は、時間分析ではその時間体験がどの様相に関係するものであるのかを明確に区別することが必要で、この4分類は過去の時間研究の混迷を整理することになると考えている。そしてOrnstein (1969) は、時間の「持続」体験を主たる課題としているが、そのアプローチに「感覚過程を考えるもの」と「認知的な情報処理にもとづくもの」という二つを挙げている。

前者の「感覚過程を考える」アプローチでは、無記の時程(indifference interval: 約0.7

秒とされている。)や知覚的瞬間(perceptual moment: 約0.1秒とされている。)のような特殊な時程を時間体験の基本単位(「時間基礎」と呼んでいる。)として、それがいかなる生理学的メカニズムに依拠するかを究明し、時間持続体験と関係づけたり、あるいは、時間体験の器官として内部時計(生物学的時計)を仮定し、主に周期的な生理的リズムによって時間持続体験を説明しようとする。しかし、Ornstein (1969)は、こうした感覚過程を想定するアプローチは時間持続体験の分析に非常に有効であるという証拠は見出せないとしている(p.33ff)。

他方、後者の「認知的な情報処理にもとづく」アプローチについては、時間持続体験の説明にあたって「無難であり、種々のデータを統合できる」(p.106, p.112)と考えている。つまり、時間持続体験を説明するためには、彼が「蓄積容量の比喩」と呼んでいる考え方が有効であるとしている。それは、「ある時程の情報の蓄積容量が増加すると、その時程の持続体験も長くなる」というもので、時程の持続体験はその蓄積容量にもとづく構成作用と考えるのである。したがって、その情報の蓄積容量を変えるような手続きとして、入力情報の数を変化(増加、減少)させたり、入力情報の符号化を変えたり、記憶単位(チャンク)にまとめたり、それに向ける注意を変えたりすれば、その時程が終了した後での持続体験(短期記憶、長期記憶)が変わってくる。

Ornstein (1969)は、この「蓄積容量の比喩」を裏づける実験を行い、次のような知見を明らかにしている：

- (1) ある時程中の刺激の数が増えると、その時程の持続体験が長くなる。
- (2) 刺激の複雑さがある点まで増大すると持続体験は長くなるが、その点を越えるとそれ以上は長くない。
- (3) 刺激の複雑さが個々の刺激の複雑さだけでなく、刺激系列の複雑さである場合にも、複雑さが増すと持続体験が長くなる。
- (4) 簡単に符号化できる刺激系列では、そうでない刺激系列よりも、持続体験が短くなる。
- (5) 刺激配列に自動的に反応する場合(=課題をよく訓練している場合)には、自動的に反応できない場合(=課題になれていない場合)よりも、持続体験が短くなる。
- (6) 刺激配列のなかで多くの事象が起きている場合に持続体験が短くなることは、非常に複雑で社会的な刺激配列(=ダンサーが休みなく踊っているモダンダンスの映像)についても認められた。
- (7) 入力情報を変化させずに時程の蓄積容量を変えるために観察者が多くのことを忘れるように条件を配列すると、そうでない場合よりも、その時程の終了直後の持続体験が短くなった。つまり、時程中の情報を少ししか保持しなかった場合には、その時程が終了したとき、その時程を短く感じる。
- (8) 同様に蓄積容量だけを変えるために時程が終わった後で複雑な刺激を再符号化して簡単な刺激にすると、刺激を再符号化しなかった場合よりも、時程の持続体験は短くなった。

これらの知見は、持続体験に関する「蓄積容量」説を支持するものである。そして、経験する入力情報それ自体が時間持続体験をつくり出しているのではなく、その情報の記憶

から時間持続体験が生まれることを明らかにしており、「時間認知」のきわめてダイナミックな機能を示している。

(2) 時間知覚の継時的処理モデルによる内的過程の研究

実験心理学的アプローチでよく用いられる精神物理学的方法では、刺激としての物理的連続体上の物理量と、その内的（心理的）事象としての心理学的連続体上の心理量との二つの連続体を仮定して、刺激－反応関係をとらえようとしてきたが、これを時間研究に当てはめた場合、物理的連続体は時計時間であり、心理的連続体としての時間の内的事象は主観的時間になる。ところが、主観的に時間を意識する場合には、時間の流れ（連続性）に区切りをつけて、ある時間幅を他の時間幅と区別して「非連続化」しなければならないので、その内的過程では非連続な時間が存在しているのではないかと考えられる。そこで神宮（1989）は、時間知覚では、連続量としての時間の物理量が、連続量としての心理量に直接変換されるとは考えにくく、その内的過程では、①刺激としての物理量の非連続化（離散量化）のプロセス、②内的事象としての離散量を連続化（連続量化）するプロセス、という二つの継時的処理過程を仮定することができるのではないかと考えた。つまり、内的事象としての時間には、離散量としての時間（「内的時間」と呼んでいる。）と連続量としての時間（「心理的時間」と呼んでいる。）とがあり、時間知覚の内的過程ではこの二つを考えなければならないことになる。

従来の時間知覚の研究では、「内的時間」として「なんらかの計時システムによる処理結果」と「記憶に蓄えられた時間情報の処理結果」とを仮定し、短い時間では主に計時システムが働き、長い時間では主に記憶過程が働くと考え、前者を「時間知覚」とし、後者を「時間評価」として、それぞれ異なる内的過程に対応するものと考えてきた。しかし神宮（1989）は、ある時間を境にして、内的時間をもたらす内的過程（＝離散量化の過程）の働きが突如異なるとは考えにくいので、時間知覚と時間評価の区別をなくし、それらを時間知覚と総称して、内的時間と心理的時間との関係を明らかにしようとした。

まず、神宮（1989）は、連続量としての時間を非連続化する内的過程として、ある単位時間で時間を区切る計時システムを仮定した種々のモデル（体内時計、無記時間、知覚的瞬間仮説、時間量子説とその修正モデル、内的時計モデル、等）を概観して、これらのモデルが、内的時間の存在の可能性を示唆しているが、実際に論議しているのは心理的時間であるということを指摘し、時間知覚の刺激－反応関係を媒介する内的過程として、pacemaker→counter→chrono-store→短期記憶から成る継時的処理モデルを仮定した。

このモデルは次のような構造と機能を持つものである (p.24-27) :

最近の神経生理学では脳の神経回路に一定の時間間隔でパルスとしての電気信号を発する回路(「反響回路」と呼ばれている。)が存在することが明らかにされているが、その回路を1回電気信号が巡回するのに一定の時間(ループ・タイム loop time)がかかり、その時間間隔でパルスが発せられる。脳神経科学の研究成果として、ループ・タイムはほぼ4msと25msという2種類があることが報告されている。この種のパルスが特定の時程の間にpacemakerによって発せられるが、このパルス間の時間が時間知覚の単位時間である。そのパルス数をcounterが数えるが、その結果は、感覚貯蔵庫としてのchrono-storeに送られる。この送られた数をchrono-storeは一次的に貯蔵する。この時点では、時間の内的事象は、その時程がいくつかの単位時間で構成されているかという「数としての離散量」であり、無意識のうちに自動的に処理される。その後、この内容が短期記憶に送られるが、この時点でも、時間の内的事象は「数としての離散量」である。短期記憶からは意識的制御が可能になり、なんらかの反応が必要とされている場合、したがって、時間を意識する場合には、連続量としての心理的時間が形成され、必要な反応形態に合致するようにそれが変換されて反応がなされる。感覚貯蔵庫や短期記憶には、一度にどれだけのものが記憶できるかという容量に関する限界と、どれだけの時間それを記憶していられるかという時間に関する限界がある。

一般に、感覚貯蔵庫については、時間の限界は最大で1s程度であり、容量の限界は「知覚の範囲」と呼ばれ、 4 ± 2 (2~6) という数が考えられている。これは、感覚貯蔵庫内の情報を再生している間に大半が消失してしまうため、この程度のものしか再生できないからである。また短期記憶については、時間の限界はほぼ15s程度であるが、その内容に注意を向けて保持しようとリハーサル(rehearsal)すれば、その間は記憶されている。容量の範囲は「直接記憶の範囲」と呼ばれ、なんらかのまとまり(チャンクchunk)を単位とした数で 7 ± 2 (5~9)と言われている。

時間知覚に関する感覚貯蔵庫や短期記憶でも、時間と容量の限界は存在すると考えられる。

このモデルにもとづいて神宮(1989)は時程の尺度化の実験を行っている。

一般に、刺激と反応との間の量的関係を研究する場合、弁別閾を単位とした弁別尺度、心理量を等間隔に分割することによって得られるカテゴリー尺度、心理量間の比率関係によって得られるマグニチュード尺度などが考えられるが、神宮(1989)は、時間の長さのマグニチュード尺度化と弁別尺度化を通して、時間知覚の内的過程を探っている。

マグニチュード尺度の構成結果からは、刺激としての物理的時間とそれを知覚した主観的時間とが等しくなる無記時間(600 ms)を境にして、それ以下では過小評価が、それ以上では過大評価が見られたが、これを時間知覚の内的過程の問題として取り上げると、記憶過程における時間と容量の限界にかかわる負荷の問題を示していると考えられた。

また弁別尺度化の結果では、200 ms~2sの範囲内ではウェーバーの法則が成立するが、200ms以下では提示時程の増大とは無関係に弁別閾は一定となり、他方2s以上では弁別閾は階段関数的に増大する。こうした結果から、時間知覚の初期の処理過程について、pacemakerのループ・タイムはほぼ4msであり、感覚貯蔵庫としてのchrono-storeの容量の限界は3であり、短期記憶では12.5msが最小単位時間となる。提示時程を最小単位時間で区切ることによって得られた数が内的時間であるが、内的時間から心理的時間への変換過程(連続量化)については次のように考えられる:

- ① 提示時程の増大によって内的時間の数が多くなり、短期記憶の容量の限界(7 ± 2)をはるかに越えることになると、最小単位時間2個分を1個の単位時間とする階層的チャンク化によって単位時間を形成し、内的時間の数の縮小化がなされる。
- ② このような単位時間に関する階層的チャンク化によって、提示時程のある範囲内では単位時間が一定となり、提示時間の増大につれて弁別閾が段階関数的に倍数増加する。しかし無限に増加するのではなく、最大単位時間は200 msであり、それは12.5 msの最小単位時間による4段階(12.5ms→25ms→50ms→100ms→200ms)の階層的チャンク化によって形成される。

- ③ 連続量化の過程では、こうした単位時間の場合と同様の階層的チャンク化によって、単位時間の数としての内的時間から心理的時間が形成される。つまり、心理的時間の形成に際してのチャンク化の階層の数は短期記憶の容量の限界 (7 ± 2) を考えると 4 程度であるので、2 個の単位時間を 1 個とするチャンク化が行われている場合、16 個 (2 の 4 乗) の単位時間が短期記憶で保持されていることになるが、その結果、上記のように、最大単位時間が 200 ms になる。この 200 ms を単位時間として 4 段階の階層的チャンク化で心理的時間を形成すると 3.2s になり、3 段階で形成すると 1.6s になる。つまり、最大単位時間の 3～4 段階のチャンク化で形成される心理的時間は、ほぼ 2s 程度となる。

このように神宮 (1989) による「時間知覚」の分析は、本節で先に紹介した 20 世紀中期における「時間知覚」の現象分析ではなく、時間情報処理のメカニズムに迫ろうとするものである。

Ⅱ－５ 「時間認知」研究と「時間消費」の大きな隔たり

時間に関する実験心理学的研究は、比較的短い時程の「知覚」「評価」「判断」などについての現象分析を経て、情報処理や記憶を含んだ「認知」の機能によって説明する方向に進んできているようである。この領域では、今のところ「時間消費」との接点を見出すことは困難であるが、そのなかでは Ornstein (1969) の「蓄積容量」による時間持続体験へのアプローチが「時間消費経験」の説明根拠を示してくれることが期待できるように思われる。

また Fraisse (1957) の「時間の支配」の概念のなかには、時間を計り、再構成し、「好都合なように利用する」(原訳, 1960. p.15) ということが含まれており、「われわれは時間に貨幣のような価値を付する。……われわれは時間を交換の具にしたり、われわれの寛大さの顕示にしたりして」(原訳, 1960. p.303) という側面を考慮の枠内に置いているところから察すれば、「時間使用」につながる問題意識が潜んでいると見ることもできよう。

しかし、本節で展望している「時間認知」に関する心理学的研究内容と「時間消費」との隔たりが非常に大きいことは否定できない。

Ⅲ 社会心理学と社会学における時間研究の課題

Ⅲ-1 社会心理学的課題としての「時間」

(1) 精神物理学的な「時間知覚」研究への疑問

Joseph E. McGrathは、Janis R. Kellyとの共著『時間と人間相互作用：時間の社会心理学に向けて (Time and Human Interaction: Toward a Social Psychology of Time)』(The Guilford Press.1986)のなかで、社会心理学がその理論と研究の両面で時間に対して実質的にはまったく注意を払ってこなかったと述べ (p.2)、後述のように「時間なき社会心理学 (timeless social psychology)」(p.5)と呼んでいるが、他方で、心理学の分野で広範に時間研究を行っているのが「時間の経過の主観的判断」に強い関心を寄せている「古典的な精神物理学の伝統にしたがっている実験心理学者」であると述べている (p.67)。

そしてMcGrath & Kelly (1986. p.68-70)は、「時間の精神物理学」では、経過時間の長さの受容 (reception) とその時間間隔を解釈 (interpretation) する変換形態を研究課題としており、そこには、人々が“真の”客観的時間を知覚的時間という別のボタンに“ゆがめる (distort)”方法や理由を問うという姿勢があると述べ、見出されている知見は大量かつ詳細であるが、まだ不完全で未解決なものが含まれているとも言っている。さらに、精神物理学的方法が非常に人工的で実験室的であり、行動科学や社会科学で用いられる多様な方法論のなかのごく限られた種類の方法しか用いておらず、その狭い範囲内の方法の違いに結果が敏感に影響されると批判している。

しかし、同時に、時間経験に関して価値がある知見も生み出されているとして、時間閾、時程と時間的まとまり、連続感やリズム感、無記時間、時間判断でのウエーバーの法則、客観的時間と主観的時間の関係を表す関数などを紹介している。ただ、基本的には、こうした時間知覚や主観的時間判断に関するほとんどの知見がごく短い時程についてしか得られておらず、他方で、概日周期のなかでの時間判断のような人の活動に強く関連する長い時間的経過をとらえていないことや、また、このような長い時間に関する判断であれば、文化的・社会的影響の下にある「時間の概念化 (conception of time)」の問題とつながりが生じるが、そうした視点がないことにも不満を示している (p.70)。

このように「時間の心理学」の今後の展開は、精神物理学的方法論に依拠するだけでなく、また「時間認知」の問題に限定されずに、より広い人間行動現象としての体系化に向

けて行われるべきであるが、その場合、社会心理学的アプローチが有力な方法論になることは疑う余地のないところである。

(2) 「時間なき社会心理学」からの離陸

ところが、McGrath は、上記のように社会心理学は「タイムレス (timeless)」であると述べている (McGrath & Kelly, 1986. p.5)。そして、実験心理学を含む他の多くの研究領域での取り組みに比べて、人間の社会的行動を研究する社会心理学で、「空間」と並んで人間生活における中心的次元である「時間」に関する研究への関心が非常に低調であるとして、「時間の社会心理学」の必要性和重要性を強調している (McGrath, 1988. p.7, p.10.)。

McGrath & Kelly (1986. p2-4) によれば、社会心理学における時間研究の状況は次のようである：

- a. 時間的圧力 (time pressure) や時間的オリエンテーション (temporal orientation) に関する研究が少ない。
- b. 方法論的に時間的要因 (temporal factor) は欠かすことができないが、その重要性はほとんど認められていない。遅延、潜時、持続などのメジャーは非常によく用いられているが、他の変数の測定や統制のための方法であると考えられている。実験における時間的制約、時間的順序、時間的間隔なども分析結果と関連づけて考察されることが少ない。
- c. 研究パラダイムとしても、時間的文脈のなかで現象をとらえる姿勢が弱い。
- d. 実際の理由としては、時間の研究には時間がかかり、他のコストも高くなる。
- e. 概念として「過程 (process)」「動態 (dynamics)」「変化 (change)」など時間依拠的な概念がよく論じられるが、その意味が含んでいる本来の内容を示すような知的努力はあまり払われていない。

McGrath & Kelly (1986) は、このように「時間」が取り上げられなかったのは、基本的には、現代の社会心理学が「均衡－適応プロセス (equilibrium-adaptation process)」を仮定したパラダイムにもとづいて研究しているためであると言う。このモデルでは、変化は一時的であるとみなし、付帯現象的な誤差変動であるか、本来的には安定的なシステムにおける攪乱要因であると考えられている。同様の趣旨から、McGrath (1988, p.8) は、この安定指向性 (static orientation) が、研究対象システムにおける時間的特徴を過小評価し、時間の研究に対する実際の・方法論的障害を解消する必要性を感じず、研究課題のなかの多くの時間的特徴に取り組むよりも、その課題のなかで時間を考えないことの方が容易であるという方向に働いた、と述べている。

しかし、McGrath & Kelly (1986. p5) は、変化や過程を現実的なものと見て、それらの基底にある時間的側面を研究する社会心理学者が現れつつあるとも述べている。時間は社会心理学的現象のなかで重要な役割を果たしており、社会心理学の理論的概念や方法論の

なかで重要な側面を構成することが認識されはじめたからである (McGrath, 1988. p.8)。

Ⅲ－２ 「時間の社会心理学」の方向

(1) 独り立ちに向かう「時間の社会心理学」

McGrath (1988. p.8) およびMcGrath & Kelly (1986. p.8-9) は、時間の問題は社会心理学研究のなかで少なくとも次の三つの機能的役割でとらえることができると考えている：

- ① 独立変数の役割……種々の時間的要因が個人・集団・組織の社会的行動のいろいろな側面に影響を与える。たとえば、個人の課題解決行動に及ぼす時間的圧力の影響。
- ② 従属変数の機能……時間の知覚・体験・使用などの人間行動に及ぼす種々の社会的・心理的要因の影響や行動の時間的パターン化に関係する。たとえば、相互作用し合う二人のムード状態が彼らの会話行動の時間的パターンに及ぼす影響。
- ③ 方法論的問題の重要側面……いかなる内容の研究であっても、研究戦略・研究計画・測定指標・操作方法などに影響する要因となり、独立変数と従属変数の関係に影響したり、研究パラダイムの論理構成で重要な概念的役割を果たす。たとえば、実験的処理とその効果測定との間の時間間隔が両者の関係の程度や形態に如何に関連するかという問題。

McGrath & Kelly (1986, p.9) およびMcGrath (1988, p.8) が「独り立ちの“時間の社会心理学”(a full-fledged social psychology of time)」と呼んでいる研究体系であるためには、「時間」はこれら三つの機能的役割を果たすものとして位置づけられ、その科学的操作のなかに組み込まれなければならないであろう。

しかし、本稿でのわれわれの問題意識との関連では、特に注目する必要があるのは②の「従属変数として現れる時間的現象」であり、「時間的経過に対する人間反応」や「時間的パターンでとらえる人間行動」である。

こうした人間行動の時間的特徴は、時間の水準の「ミクロ～マクロ」の連続体の上で区分されうる (McGrath & Kelly, 1986. p.7)。時間水準でのミクロ・レベルの行動は数秒や数分の短い時間単位でとらえられるものであり、マクロ・レベルの行動は長い年月で、ときには生涯という長い時間単位でとらえられるものである。

そして、当然のことながら、そうした時間単位でとらえられる人間行動は、個人レベルや集団レベルからマクロ・システムの社会レベルまでのそれぞれで見ることができる。たとえば、時間知覚、時間意識、時間的オリエンテーション、時間の配分や利用、行動の継続性や変化、行動のリズムや周期性、行動の発達や普及の過程など、時間的経過や時間的条件との関係で現れる行動現象は、個人、集団、組織、部分社会、全体社会などのどの集

合レベルでもとらえることができる (McGrath, 1988. p.9)。

(2) 「時間の社会心理学」の枠組み

このような側面をも含めて、McGrath (1988) は編著書の『時間の社会心理学 (The Social Psychology of Time: New Perspective)』(Sage Publications, 1988) の構成内容が、「時間の社会心理学」の研究的枠組みの基礎になると考えている (p.11ff.)。その枠組みは次の四つの側面から成り立っている：

- ① いかなる時間的行動現象 (temporal facet) が強調されるか。
 - ・生活 (人生) のペース (pace of life)
 - ・行動のリズム (rhythms of behavior)
 - ・時間配分と経験内容 (allocation and enjoyment)
 - ・周期の進展 (developmental cycles)
 - ・連続性と変化過程 (continuity and change process)
- ② いかなるサイズの社会的単位 (social unit) が強調されるか。
 - ・個人 (individual)
 - ・2 者間関係および小集団 (dyadic and small group)
 - ・小さな社会システム (small social systems)
 - ・大きな社会システム (larger social systems)
- ③ その現象はいかなる時間的尺度 (temporal scale) に関連しているか。
 - ・秒およびその細分 (seconds, subseconds)
 - ・分 (minutes)
 - ・時間 (hours)
 - ・日 (days)
 - ・週 (weeks)
 - ・月 (months)
 - ・年 (years)
- ④ その現象は当該の社会的単位の内的過程と外的関係のどちらを重視した見方か。
 - ・内的過程重視 (internal perspective) : 当該の社会的単位にとって内的な過程に主に注目する。
 - ・外的関係重視 (external perspective) : 当該の社会的単位と関連する周辺条件との関係に主に注目する。

ここに示された「時間の社会心理学」の枠組みを構成する 4 側面のなかで、①の時間的行動現象をこのような行動的特徴にもとづいて網羅的にカテゴライズすることは困難であろう。McGrath (1988) は『時間の社会心理学』の結論で、同書では取り扱っていないが「独り立ちの“時間の社会心理学”」の構築するために有効な研究課題として、次の七つの時間的行動現象を追加している (p.260ff.)：

- (1) 認知過程と時間経験.
- (2) 集団内の行動のリズムのエントレインメント (同時随伴性) と他のリズム過程.
- (3) 時間、仕事のタイプ、仕事の遂行.

- (4) 時間と集団発達.
- (5) 種々の活動分野への時間配分、仕事状況と非仕事状況の間の時間的相互作用.
- (6) 組織における時間的問題.
- (7) 方法論との関係で見る時間の機能.

こうした「時間」に関する社会心理学的課題の基底には「時間とは何か」に関する人々の認知的概念化があるものと思われる。たとえば「資源としての時間の稀少価値」「時間はただ経過していくものか、循環しているものか」「時間的経過は等速か、緩急の違いがあるか」など社会的・文化的に規定される認識や信念の問題がある。

Ⅲ-3 社会学における時間研究とその枠組み

(1) 現代社会学における時間研究の欠落

社会心理学で「タイムレス」の状況から離陸する方向が探られているのと同様のことが社会学においても見られるようである。『時間の社会学 (The Sociology of Time)』(Macmillan, 1990) の編著者であるJohn Hassardは、その序章の冒頭に「時間は現代の社会学的分析で欠落している変数 (the missing variable) である」とか「社会学はほとんどタイム・フリー (time free. 時間抜き) だと言える」と述べている。

Hassard (1990. p.1) によれば、大抵の社会学者は、時間をそれ自体に価値のある課題としてよりも研究上の付随的特徴として処理しているが、時間分析 (temporal analysis) がほとんど無視されているのは、社会学的研究が「状態 (state)」の分析を強調し、そのため研究過程も長期的・経時的 (longitudinal) であるよりも一時的・共時的 (synchronic) であり、社会的構造の変化の消長やダイナミクスよりもその永続的特徴が取り上げられ、要するに、時間は、説明変数として導入されないか、事後的な理由づけ (post hoc justification) のために導入されるかであった。したがって、他の学問領域に比べて、社会学では時間に関する知識体系の発達が遅れていて、1970年代までは文献上でもほとんど注目を集めていなかった (Hassard, 1990. p.2)。

しかしHassard (1990) は、社会学の歴史を見れば、デュルケム (Durkheim, E.)、ソーキン (Sorokin, P.)、ガーヴィッチ (Gurvitch, G.)、ムーア (Moore, W.) などの研究から「時間の社会学的研究」に関連する種々の概念を得ることができ、また、時間は稀少資源 (scarce resource) として描くことができ、社会的意味を持った媒体として機能することも学ぶことができると考えている (p.5)。一つの社会のすべての成員は共通の時間意識

を共有していて、その共通意識を基礎にした時間的リズムを通して社会生活が成り立っているが、そのため、時間には時計時間 (clock time; 天文学的時間) だけでなく社会的産物としての「社会的時間 (social time)」もある。社会的時間は、単に量的なものではなく、質的でシンボリックな特性を帯びている。

(2) Hassard (1990) による「社会的時間の研究枠組み」

Hassard (1990) は、上記の先達を含め、社会学者が時間の性質 (nature of time) を規定するときの視点は二つに分かれ、「社会的時間と時計時間の概念的差異」あるいは「時間のパタン化のイメージが直線型 (linear-time) か循環型 (circular-time) か」という問題設定のどちらかを論じていると整理したうえ、それぞれの視点での論点の概略をふまえて (p.6-13)、一つの研究的枠組みを示している。その枠組みは、社会学的研究における「時間」概念の主な使い方は4通りあり、それぞれが社会的な変化や過程を説明するための直接的な意味合いを持っていることを明示するものである (p.13-17) :

① 社会的要因としての時間 (time as a social factor) : 構造や過程を説明するもの。

時間は社会的相互作用に対して「資源」および「社会的意味」という二通りの影響を与えている。

まず「資源」としては、時間は、総和が固定した変数であると見られ、いったん使用すると取り返すことができない。時間が貴重になるにつれて基礎生活財のイメージを帯びて、次第に稀少財 (scarced good) とみなされるようになる。代替的な使い方が増えていき、多様な目的のために交換可能となり、それがさらに価値を高めていく。

他方、「社会的意味」としては、時間は、複雑な意味構造をつくり出す媒体であり、それを通して人々が日々の出来事を調整したり再現したりするものである。時間に対する態度は動態的で、特定の時点が特別の社会的・個人的意味を獲得するようになり、特別の反応を喚起するようになる。そこで時間は経験事実的資源 (factual resource) として利用されたり、日常的行為を統合する強力な文化的記号を持つようになる。

② 因果的連鎖としての時間 (time as a causal link) : 社会理論の諸要素間をつなぐもの。

社会分析のモデルでは時間によって変数間の因果的結びつきを描くことができるが、時間それ自体が因果関係の存在を確認するのではなく、すでに仮説化されている関係を検証する証拠の働きをするものである。たとえば、空間－時間関係を見たり、「背景としての時間 (time-as-context)」の考えのなかで、この働きが成り立つことが多い。

この「背景としての時間」の考えは、空間や時間は種々の事象に意味を帯びさせる背景幕になるというもので、図 (figure) である事象が背景 (地 ground) である特定の歴史的時期との関連で解釈される場合のように、時間の主要な性格は、時間的に限定された構造的パタンを表すので、そのように時間を使うことが、当該事象をコンテキストから離れた独立のものとしてでなく、より大きなパタンとの関係で評価することを可能にする。同時に、時間的な「期間」を区切ることによって、期間内の行為のパタンを取り出し、それをより大きなパタンのなかに組み込むこともできる。

③ 量の尺度としての時間 (time as a quantitative measure) : 諸要素を測るもの。

社会的時間は、社会システム内に生じる変化の量の測定をする際に用いられるが、このためには、時間的系列の尺度を定め、その時間尺度上の種々のポイント (時点) での他の変数の変化を記述する。そのため、変化の生起状況の評価においては選定した時間尺度の構造と次元が重要な条件になり、間隔尺度的な時間の長さが分析対象の変化のタイプに影響することもあるので、段階や期を特徴づける質的意味にもとづいて時間単位の設定をしたり、時間を順序尺度に変換して年代的順序で事象を位置づけることもある。また、変化の持続 (duration) ・スピード・強さなども量の単位の時間でとらえられる重要変数になるが、その意味は観察対象の社会システムや全体的パタンとの関連で変わることを考慮すべきである。

④ 質的測度としての時間 (time as a qualitative measure) : 要素間相互作用を表すもの。

社会的な変化や過程の質的側面をとらえる指標として時間を用いる場合、社会的変化と社会的過程の違いに注意する必要がある。社会的過程は一つの安定したコンテキスト(流れ)のなかでの均衡状態の諸局面を表すものであり、社会的変化は最終状態における質的差異を意味するものである。一連の変化の過程の累積的效果が質的に異なるシステム関係や新しい形態の社会的構造につながる。社会的変化の過程から生まれる結果は多様であるので、それを見るとき、もとの(変化の過程に入る前の)構造であった状態の時間的持続期間、生じた変化過程の系列的順序、重要な変化要因の影響の程度などが問題になり、変化の過程の質的帰結を記述するために量的な時間測定が必要になることも多い。

このHassard (1990) の枠組みは、社会学の研究的方法論として「時間」を導入する場合の観点を述べたものである。この枠組みのなかで、われわれが問題にしている「時間消費」という行動的内容にとくに関連するのは、①の「社会的要因としての時間」において、時間を「資源として」あるいは「社会的意味として」みる場合である。つまり、「時間はどのような資源として認知されているのか」「時間はどのような交換(代替)可能性を持つのか」「時間は(社会的行動との関係で)どのような意味を持っているのか」「時間使用のパターンはどのような社会的意味を表しているのか」などが問題になるからである。

他の②～④の観点も、時間消費の研究のための基本的方法論として、参考にすることができる。

(3) 生活時間への社会工学的アプローチ

生活時間の調査研究は、本稿 I - 1 - (2) ですでに名前を挙げたSorokin & Berger (1939) が『人間行動のタイム・バジェット (Time Budgets of Human Behavior)』(Harvard University Press, 1939)において、人々の動機にもとづいて分類した55タイプの行動について時間の使い方を分析し、社会的接触や社会的過程との関係を検討したのを初めとして、1960年代に入ると、わが国ではNHKが多数の社会学者の協力のもとに『国民生活時間調査』を昭和35年(1960年)から5年間隔で定期的実施するようになり(NHK放送文化研究所, 1963)、また外国ではハンガリーの社会学者ザライ (Szalai, A.) を代表者とした国際比較調査が欧米12カ国で1964～66年に行われるなど (Szalai, 1972)、社会学的関心を集める課題になってきている。

矢野真和らは、本稿 I - 1 - (1) の冒頭で引用した『生活時間の構造分析：時間の使われ方と生活の質』(経済企画庁国民生活局国民生活調査課編, 1975) とその約20年後に発表された『高齢社会のグランドデザイン：生活スタイル・ケア』(財団法人財政経済協会, 1992) に基礎データを提供した二つの調査の経験を軸にして『自由時間の社会学：社会の時間・個人の時間』(矢野真和編著, 東京大学出版会, 1995) を公刊している。

そのなかで、矢野（1995）は「時間の性質」について、三つのユニークで魅力的な性質を持っていると述べている：

- ①【総合性】時間は生活全体に関係する変数である（p.31）。生活時間研究は生活全体を総合的に扱う視野を提供してくれる（p.211）。
- ②【計測性】時間は計測可能な変数である。客観的に測定可能で共通に利用可能な物差しになる。時間は非経済的領域を横断する計測変数（非経済指標）であるがお金（経済指標）も時間に変換可能である（p.211）。
- ③【操作性】自然の時間を変えることはできないが、時間を利用して生活を秩序立てたり操作することができる（p.211）。

そして、生活時間を分析する研究的意味について次のように考えている（p.4）：

私たちの生活がすべて時間に支配され、自由意思による時間の選択が完全に失われているわけでもない。個人の時間の使い方と社会秩序としての時間の関係を理解することが大切である。個人の生活と社会変化の相互依存関係、言い換えれば、個人の選択の幅と社会秩序の拘束との関係、この普遍的な社会科学的命題を解きほぐす焦点として、生活時間は格好の鍵になる。

矢野（1995）は、こうした社会学的視点から、生活時間を分析することによって「生活の質を診断し、豊かな社会を構想したい」という社会工学的目的を明らかにしているが（p.212）、本稿の課題である「時間消費」との関連では、「タイム・バジェットは、いくつかの行動に消費された時間の量として表現される」とし、その定義は、わが国で一般に「生活時間」という言葉で通用しているものと同じであると述べていて（p.1）、生活時間によって「時間消費」の様相が具体的に表されると考えていると思われる。

Ⅲ－４ まとめ：中心的課題に「自由時間の使い方」

社会心理学や社会学の研究では、当初、「タイムレス」とか「タイム・フリー」と言われながらも、時間、とくに「時間配分」の問題を視野に入れるようになり、「生活時間調査」が描き出すような「経験内容や活動分野と関連づけられた時間配分」（McGrath, 1988. p.11ff, p.263.）のなかで、「自由裁量時間の使い方」である「時間消費」がその問題領域の一角を占めるようになっていく。とくに矢野（1995）が「生活の質を診断し、豊かな社会を構想したい」（p.212）という目的で生活時間研究を行うとしているところは、当然、自由時間や余暇時間の使い方を中心的な分析課題にするものであり、われわれの言う「時間消費」（矢野は「時間消費」という表現をほとんどしていないが。）を取り扱うこと

になろう。

こうした生活時間研究とともに、自由時間や余暇時間に関する人々の欲求・価値観・態度や使用行動（＝消費行動）に関する社会調査や世論調査からも「時間消費」の問題にアプローチするデータを得ることができよう。それらのデータを有効に位置づける体系的枠組みの構築を目指さなければならない。

IV これからのアプローチの視点：生活時間と消費者行動

自由裁量的に生活時間を使う（過ごす）ことを「時間消費」と表現し、その時間消費行動に関する研究の方向や内容を探るために、実験心理学、社会心理学、社会学の分野における「時間」に関する過去の研究の概要を理解し、そのなかでの「時間消費」あるいは「時間消費行動」の位置づけや分析内容を把握したいと考えたが、現在のところ、その手がかりを、上記の3分野の枠内では、社会学者が中心になって行われている生活時間研究のなかに求めることができるように思われる。他方で、「時間の社会心理学」（McGrath, 1988. p.11ff）の問題意識にも、時間的行動現象として「時間配分と経験内容」をはじめ「生活（人生）のペース」や「行動のリズム」など「時間消費」に関連するテーマが含まれていることを知ることができた。したがって、生活時間研究によって明らかにされる時間配分と経験内容・活動分野との関連を「時間消費」の観点から体系的に整理することが、今後の主要課題の一つになるものと考えられる。

他方で、本稿ではほとんど取り上げていない消費者行動研究の分野における「時間」に関する問題意識と分析内容を把握することが必要である。

この分野では、マクロ消費現象やミクロ消費行動の時系列的変化を分析することはごく日常的に行われており、また、多くの研究者によってモデル化されている種々の消費者意思決定過程も時間軸上での消費者行動の変容・推移を描き出したものである。そうした意思決定過程モデルのなかの変数としても、たとえば、このタイプの総合的な図式モデルを早くから提唱しているHoward, J. A.は1963年モデルの外生的変数の一つとして「時間的圧力の程度（amount of time pressure）」を導入している（Howard, 1963. p.89ff）。

時間に関するこのような扱いは本稿Ⅲ－2で述べたMcGrath（1988）の「独立変数としての役割」に当たるものであるが、「従属変数としての役割」を示唆する記述は、消費者

行動における自由裁量時間の重みが次第に増していくという論調のなかに見ることができよう。そうした見解の早期のものとして、労働時間短縮に伴って人々が生活をより楽しむようになるという筋書のもとに、Harper (1960) が示している次の七つの命題がある：

1. 平均的なレジャー時間は生産性向上の副産物として年ごとに増加している。
2. 自由裁量所得の増大は自由裁量時間の増大への圧力をつくり出している。
3. レジャー時間は、ただ単に現代生活の属性の一つではなく、それを形成する際の基礎的な力になるものである。
4. 時間とお金は、一方を満足するように使うためには他方を減らさなければならないという場合、葛藤状態におちいる。
5. 特定の製品カテゴリーでは、お金と時間の間に適切なバランスがある。
6. われわれは、レジャーの楽しみを考えるよりも、お金のことを考えることに通じている。
7. 自由裁量的な時間は、自由裁量的なお金と同様に、ますますビジネス競争の目的になっていく。

同様に、Walters & Paul (1970. p252) [佐々木土師二監修・社会行動研究所訳, 1974. p.242]も、マーケティングの課題が、消費者の自由裁量的なお金を目当てにすることから自由裁量的な時間を重視することに移ると述べている。

このように、自由裁量時間の問題は、消費者行動研究の分野では早くから関心を集めている。したがって、それをいかに使うかという問題、つまり「時間消費」の問題が消費者行動研究の枠内でどのように論じられ分析されているかを把握することが必要になる。

この方向からのアプローチによって「時間消費の心理学」の体系化の途を探る意味は大きいと思われる。

文 献

- 安部三郎 (1936) 時間意識の心理. 東宛書房.
- 赤松潤 (1993) 時間の心理学. 近代文藝社.
- Foote, N. N. (1966) The time dimension and consumer behavior. In Newman, J. W. (ed.) On Knowing the Consumer. John Wiley & Sons. 38-46.
- Fraisse P. (1957) Psychologie de Temps. Presses Universitaire de France, Paris.
- [原吉雄訳・佐藤幸治監修 (1960) 時間の心理学：その生物学・生理学. 東京創元社.]
- Gilliland, A. R., Hofeld, J. & Eckstrand, G. (1946) Studies in time perception. *Psychological Bulletin*, 43. 162-176.
- Harper, M. Jr. (1960) The new conflict of time and money. *Business Horizons*, 3 (Winter). 23-29.
- Hassard, J. (1990) The Sociology of Time. Macmillan.
- Howard, J. A. (1963) Marketing Management: Analysis and Planning, rev.ed. R. D. Irwin.
- Jacoby, J., Szybillo, G. J. & Berning, C. K. (1976) Time and consumer behavior: An interdisciplinary

- overview. *Journal of Consumer Research*, 2 (March) . 320-339.
- 神宮英夫 (1989) 時間知覚の内的過程の研究. 風馬書房.
- 経済企画庁国民生活局国民生活調査課 (1975) 生活時間の構造分析：時間の使われ方と生活の質.
大蔵省印刷局.
- 経済企画庁国民生活局国民生活政策課 (1977) これからの生活と自由時間. 大蔵省印刷局.
- Kleemeier, R. W. (1961) *Aging and Leisure*. Oxford University Press.
- McGrath, J. E. (1988) *The Social Psychology of Time: New Perspective*. Sage Publications.
- McGrath, J. E. & Kelly, J. R. (1986) *Time and Human Interaction: Toward a Social Psychology of Time*.
The Guilford Press.
- Moore, W. E. (1963) *Man, Time, and Society*. John Wiley & Sons, Inc. .
- 根本則明 (2000) 生活価値の構造と価値の実現行動. 日本心理学会シンポジウム「生活価値の実現と生活工学」報告資料. 平成12年11月7日.
- N H K放送文化研究所 (1963) 日本人の生活時間. 日本放送出版協会.
- Nichols, H. (1891) The psychology of time. *The American Journal of Psychology*, 3. 453-531.
- Ornstein, R. E. (1969) *On the Experience of Time*. Penguin.
- [本田時雄訳 (1975) 時間体験の心理. 岩崎学術出版社.]
- 佐々木土師二 (2001) 生活資源としての時間とその消費. 流通問題 (社団法人流通問題研究協会) , 37
(1). 5-12.
- Schary, P. B. (1971) Consumption and the problem of time. *Journal of Marketing*, 35 (April). 50-55.
- Sorokin, P. A. & Berger, C. Q. (1939) *Time Budgets of Human Behavior*. Harvard University Press.
- Szalai, A. (1972) The Use of Time: Daily Activities of Urban and Suburban Populations in Twelve
Countries. Mouton: The Hague.
- Szybillo, G. J., Binstok, S. & Buchanan, L. (1976) Measure validation of leisure time activities: Time
budgets and psychographics. *Journal of Marketing Research*, 17 (February) . 74-79.
- Walters, C.G. & Paul, G.W. (1970) *Consumer Behavior: An Integrated Framework*. R.D. Irwin.
- [佐々木土師二監修・社会行動研究所訳 (1974) 体系消費心理学. R 出版]
- Watson, J. B. (1924) *Behaviorism*. University of Chicago Press.
- Weber, A. O. (1933) Estimation of time. *Psychological Bulletin*, 30. 233-252.
- Woodrow, H. (1951) Time perception. In Stevens, S. S. (ed.) *Handbook of Experimental Psychology*.
John Wiley & Sons. 1224-1236.
- 矢野真和 (1995) 生活時間の社会学：社会の時間・個人の時間. 東京大学出版会

—— 2001. 7. 9 受稿 ——